

有田町歴史民俗資料館

有田町歴史民俗資料館は、泉山（いずみやま）磁石場近くに 1978 年に開館した。泉山で 1600 年代初めに発見された磁石鋤床は、有田の磁器産業の発展に欠かせないものであった。この資料館では、日々の暮らしで使われた道具や品物などの人工遺物を展示し、町の磁器生産の歴史を紹介している。展示されている道具のほとんどは江戸（えど）時代（1603～1867）に使われたものだが、現代の窯元でも似たような道具が依然として使われている。

最初の展示では、有田陶磁美術館所蔵の皿絵をもとに、有田焼がこれまでの歴史でどのように作られてきたのか、その概要を紹介している。許認可ルールを厳しく定めた分業制（ぶんぎょうせい）のもと、職人たちは生産のひとつの部分にしか特化することができなかった。幕府の許可証は、成形に始まり、焼成、そして灰集めに至るまで、焼きものに関する様々な生産業務を規制するために使われた。江戸時代に使われた鑑札も展示されている。1870 年代に藩制度が解体されると、鑑札も不要になった。上絵のみを専門に行っていた今右衛門（いまえもん）窯なども含め、ほとんどの窯元は生産工程を拡大し、内部ですべてを手がけるようになった。

第二次世界大戦中、国内は金属不足に陥ったため、陶磁器市場が盛況になった。有田の窯元では郵便箱やビン、カン、硬貨、さらには手榴弾さえも磁器で作っていた。展示されているその他の日用品から、労働者と裕福な商人・窯主との生活レベルの違いをくつきりと見て取ることができる。

付属の有田焼参考館は 1983 年に開館し、1,000 点以上の陶磁器の破片が展示されている。